

平成 28 年度 日本教育情報学会国際交流研究会（第 1 回：通算第 3 回）報告書

○日時：平成 29 年 3 月 25 日（土）14:00～17:30

○会場：芦屋大学 5 号館 3 階 304 教室 参加者 16 名

当該研究会は平成 26 年度に日本教育情報学会研究委員会の下に設置された研究会である。本研究会は平成 26 年度の後半から活動を開始し、今回の研究会が通算 3 回目の開催であった。以下、それぞれの発表者の講演内容等の様子を報告する。

1. 開会の挨拶等



図 1 研修会の様子：平成 29 年 3 月 25 日（土）



図 2 会場校挨拶（藤本教授（芦屋大学））

研究会に先だって今回の会場準備や運営および当日の司会進行を担当していただいた若杉祥太専任講師（芦屋大学）から挨拶があった。次に会場校を代表して本学会員の芦屋大学の藤本光司教授から本年 8 月 26 日（土）～27 日（日）に芦屋大学を会場に第 33 回年会が開催されるためできるだけ多くの会員の方々に参加して欲しいことや芦屋大学の現状や大学周辺の環境についてお話しがあった。

次に、本研究会会長の山口大学の小川勤教授から研究会開会の挨拶として、本研究会の設置の趣旨と今後の活動予定について説明があった。その中で本研究会としては、これまで以上に海外の学会や研究者との学術交流の輪を広げていきたいことや今後、国際学会や国際会議の場で研究発表を推進していきたいとの説明があった。また、平成 29 年 7 月に静岡県浜松市で開催される国際会議（AAI2017）において今のところ 3 名の本学会員が口頭発表をする予定であることが明らかにされた。さらに、中国の学会との学術交流のために小川研究会会長と陳副会長（関西国際大学）が平成 29 年度中に中国を訪問して研究交流を行う予定であることも明らかにされた。

2. 基調講演

林 徳治（日本教育情報学会会長：立命館大学教育開発推進機構教授）

「学会のこれまでの歩みと学会の研究活動の国際化について」

林当学会会長から本学会がどのように設置され発展してきたのか。また、林会長たちがこれまでどのように苦労して本学会を運営されてきたのか等について説明があった。その後、林会長のご尽力の下、2016 年に中国山東省の国立曲阜師範大学翻訳学院 e ラーニ



図 3 講演中の林徳治会長（立命館大学）

ング研究会および国立山東大学山東計算機学会（会員数約 2,000 名）との間で、教育研究に関する学術交流を深める協定（MOU）を締結した際の準備段階から締結に至るまでの状況等について発表があった。中国の大学や学会が国際学術交流の協定を締結する際には大学内に在籍している中国共産党幹部の許諾を得る必要があるようだ。協定（MOU）を締結した場所にも幹部が同席していたようだ（図 4 参照）。日本では考えられない状況だけに「学問の自由」ということをあらためて考えさせられた。林会長からは今後、学会全体としても研究活動の国際化を目指していきたいので本研究会を中心に活動を活発化させてほしいとの要望があった。



図 4 翻訳学院学部長との調印の様子

3. 研究発表

(1) 研究発表 I

「海外企業における国際人の育て方」

発表者：高橋麻司（芦屋大学院生）

現在、芦屋大学の社会人大学院生として学ばれている高橋さんから研究発表があった。高橋さんは以前、日本有数の国際化が進んだ大企業で働くとともに、海外支店に駐在した経験がある。駐在国フランスでの異文化体験や日本とフランスとのビジネスの進め方の相違等について事例を示しながらわかりやすく説明していただいた。また、ご自分の経験から国際人となっていくために必要ないくつかの重要な要素についてお話をいただいた。高橋さんによれば「国際人」とは①外国と日本の双方を知った人間、②その知識を使って役立てられる人間だという。すなわち、経験知とそれらをビジネスの場等で活用することができる人材であると定義された。また、国際人の基本として、「日本の文化、歴史、社会、経済などを端的に英語で説明できること」の重要性も強調された。さらに、グローバル人材の資質としては「逆境に耐えうる胆力」や「環境に応じたマネジメント能力」を上げ、海外諸国と日本とを結び付ける「ブリッジ・パーソン」になることが重要であるという見解を示された。このブリッジ・パーソンとは高橋さん、いわく「企業理念とビジネス手法を現地社員に浸透させることができる人材」であるようだ。海外駐在という貴重な体験をされた高橋さんの話の内容は現在、日本の各大学が目指しているグローバル人材をいかに育成するかを考える際に大いに参考になることが多く、大学生たちにもぜひ聞かせてあげたい内容ばかりであった。



図 5 高橋さんの研究発表の様子

(2) 研究発表Ⅱ

「グローバル化時代の大学教育におけるスマートデバイスの活用上の課題」

発表者：関西国際大学 陳 那森

最初に日本人学生の留学の最近の傾向として1カ月未満の短期のアジア地域へ留学する機会が増えていることが明らかにされた。

次に、関西国際大学が実施している留学に関する教育プログラムの内、海外 Off-Campus (短期) プログラムの中からグローバルスタディⅠ (台湾/2017年2月高雄、3月台中) の2つの教育プログラムの事例をもとに、引率者の立場から話題提供が行われた。まず、全体的な学習活動の流れは事前学習→現地活動→事後学習という手順で実施されるそうだ。高雄での教育プロ



図 6 陳教授 (関西国際大学) の研究発表の様子

グラムでは、高雄市を中心とした教育機関におけるサービス活動や交流活動を通して、文化や教育に関する多様性の理解を深めることをねらいとして実施されている。具体的な活動としては高校でのサービス活動、大型スポーツ施設での防災機能の視察、提携大学での親善試合、学生間交流活動、高雄市内のスポーツ施設等におけるニーズ調査等がこのプログラムの中で実施されるそうだ。もう一つの教育プログラムは台湾の小学校でのフィールドワークやインタビュー調査をもとに、教育の共通性と多様性について理解を深め、考察し、東アジアにおける教育の現状と課題を明らかにすることを目的に実施されるそうだ。具体的な教育活動としては、都市部小学校での調査活動や、山村部および浜辺部小学校での調査活動、提携大学における学生による研究発表会等が実施されるそうだ。

これらの教育活動を影から支える (学生の安心・安全) のがスマホである。機種を問わず使えて操作性もよいため「LINE here」というアプリを使って学生たちの活動をサポートしたそうだ。具体的には学生の位置確認や安否確認、緊急時の情報交換等にスマホが利用されたそうだ。

全体のまとめとしては、海外での教育活動プログラムの中でスマホ (アプリは LINE here) を活用することにより、限りある引率者で、比較的少ない費用で、学生が安心して活動することに貢献できたそうだ。また、小グループの力を最大限に発揮させ、必要最小限のスマホの活用で効率的に活動を進めることができたそうだ。

(3) 研究発表Ⅲ

「グローバル化時代を反映した大学における英語教育プログラムの改革-山口大学の事例を中心に-」

発表者：山口大学 小川 勤

最初に山口大学における定食化した共通教育カリキュラムの概要説明の後、共通教育の現在の英語教育カリキュラムの特徴と課題について説明があった。



図 7 小川教授 (山口大学) の研究発表の様子

現在、山口大学の英語教育カリキュラム (6 単位)

は1年生の6月に実施される TOEIC-IP テストの結果（スコア）でその後のコース（クラス）分けが実施される。さらに、スコアによっては認定される単位が異なる。そのため、スコア 500 点以上修得するとその後の英語の授業の単位は認定されてしまう（授業を履修しなくても単位が認定されてしまう）。特に、600 スコア以上修得すると在学中は英語の授業をほとんど履修せずに 6 単位を修得できる教育システムになっていることが明らかにされた。その結果、医学部医学科の 1 年生のように大学入学時の英語学力が高い学生はそれほど努力しなくても 1 年生の 6 月の TOEIC-IP テストまで頑張り 600 スコア以上修得できれば大学在学中は英語教育をほとんど受講せずに卒業できることになっていたようだ。これに対して大学在学中に英語の授業をほとんど履修しなくてよいのか？発展科目として、英語リーディング、英語ライティング等が用意されているが、学生は最低限の単位しか修得しない（楽をしたい）者が多いがこれでよいのかといった疑問が共通教育の英語部会（共通教育の英語の授業担当者の集団）や各学部・研究科の教員から起こったようだ。さらに、山口大学では各学部が卒業要件の一つに TOEIC スコアを入れてあるが、そのスコアが比較的 low に設定されていることが多く、グローバル時代に生きる学生たちに対する教育の質保証として本当によいのかという議論も起った。

そこで、平成 28 年度から共通教育の英語カリキュラムの改訂作業が英語部会を中心に実施され、平成 29 年度入学の新入生から挿入されることになった。カリキュラム改革の主な内容は以下の通りである。※ⅠまたはⅡはレベルを示す。a は前期。b は後期を指す。

- ①英語Ⅰ a と英語Ⅱ a（英語会話Ⅰ a と英語会話Ⅱ a）は、4月の前期開始前に1年生全員に対しクラス分けテスト（VELC TEST を利用）を実施し、TOEIC400 点相当を基準として、受講科目を決定。
- ②英語Ⅰ a、（英語会話Ⅰ a）は、TOEIC400 点未満、英語Ⅱ a（英語会話Ⅱ a）は、TOEIC400 点以上の学生が履修可能とする。
- ③後期開始前に再度、希望者を対象にクラス分けテストを実施し、英語Ⅰ a（英語会話Ⅰ a）の受講者が TOEIC400 点相当以上を取得した場合は、後期から英語Ⅱ b（英語会話Ⅱ b）のクラスへ移動することができる。
- ④担当教員は、授業終了後に成績評価を提出するが、この段階では単位は授与されない。
学生は、共通教育終了時に TOEIC テストを受験することで、当該年次で履修した英語授業科目（2～8 単位）の単位が有効（受験しなければ保留状態）になる。
- ⑤学生への成績評価の通知は、単位保留状態である旨を明示したうえで、他の授業と同様に各学期において通知する。
- ⑥TOEIC テストは2月に実施するが、受験できなかった学生用に3月にも再度実施する。また、短期語学研修や長期入院等で2月および3月の TOEIC テストを受験できなかった学生は、所定の手続きに基づき申請を行い許可された学生のみ、翌年度の前期中に TOEIC テストを受験すれば可とする。

今回のカリキュラム改革は今年度（平成 29 年度）から実施されるため、どのような成果と課題があるかについては、今後、アンケート調査や成績結果の分析等を通して明らかにしていかなければならないというコメントが最後にあった。

4. 研究会を振り返って

今回の研究会は林会長が立命館大学を3月に退官するということもあり、退官記念を兼ねた研究会となった。そのためか研究会の参加者が比較的多かった。林会長のこれまでの本学会に果たしてきた役割が大変大きなものであったことを再確認する良い機会になった。また、各発表者の内容も大変充実していたため、ぜひ他の学会員にも聞かせたい内容が多くあった。